

残り40日。その7

大きな端境期は、ミレニアムである。そのころから、男女共学の議論が終結し、磐城高校は、久方ぶりに男女共学を旨とする学校に様変わりして大きな変容を迎えるのである。

そのための準備は怠りなくしていた。その一つが、1日60分6時間の授業形態である。1時間60分は、通常の授時間の1.2倍であるだけでなく、内容は、1.5倍を進めることができる時間体制である。進捗もさることながら、自分で考える時間がきちんととれ、数学の問題探求も、英語の長文問題も、センター試験の模擬試験も60分を単位としているので、とても効率的でありなおかつ生徒にとっては大変ためになるかはたまた飽きてしまうかの瀬戸際の時間であるのだ。

男女共学第1期生は、西歴2001年(平成13年)4月に入学した。この時の女子の様々な強者たちは、非常に印象的な者たちだった。生徒会長もやがては女子になっていくだろうということをほうふつさせるプレゼンやアピールすることが上手な傑物がいた。

男子にも、傑物がうようよしていた。その後の模擬試験において、初めて、全国統一テストの分子が1の人物が入学してきた。今、東京大学医学部大学院研究室に在籍している。大学入学試験に出かけるときに、諸葛亮孔明が書いた「出師の表」の自分のことになぞらえた文章を携えて私に提出した傑物である。

「善人なおもって往生をとぐ、いわんや悪人をや」の精神でいえば、間違いなく悪人でも、この学校にいればその雰囲気と時間の中で人物になること間違いなしの空気が漂っていたということが出来る。

「磐城高校という学校は、その言葉に耐えうる学校たり得ているか。」という間違いなくなりえていくだろうという大きな期待があった。

それでも、小さいところにはほころびがあり、そのことを忘れずに問いただすことをあきらめると、易きに流れることは明白であったので、勤めて易きには流れないことを旨として授業に精進していたことを思い出す。

『知性と責任』の意味、『文武両道』の意味、『都市部の中高一貫』への信仰への対抗心がそこにはあったと思う。

今それがなくなるとは言わない。しかし、絶えず今を点検し新しい力を生み出す議論を継続していかないとこのベクトルは継続しまい。

「甲子園」「国立」「花園」「普門館」「インターハイ」等々へのチャレンジと、「東大」「京大」を始め「ハーバード」「ケンブリッジ」から、「ノーベル賞」「文化勲章」「芥川賞」など様々な尺度をもって、未来を開拓する大きな力をすべての生徒に身につけさせていく学校であり続けることが大切である。その歴史が、必ず次の世代を作る。人のつながりがまず第一間違いのないことである。